

老いの

道づれ

二人で歩いた  
五十年

沢村  
貞子

岩波書店

沢村  
貞子

老いの  
道づれ

二人で歩いた  
五十年

岩波書店

老いの道づれ

定価 1300 円(本体 1262 円)

---

1995 年 11 月 8 日 第 1 刷発行  
1995 年 11 月 25 日 第 5 刷発行

著 者 さわむらさだ こ  
沢村貞子

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店  
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・三水舎

---

© Sadako Sawamura

ISBN4-00-000255-4

Printed in Japan

㊤〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい。

老いの道づれ  
目次

一九九四年……

逝ってしまったあなた 2

寄り添って 10

あなたの遺稿 15

一九四五年……

神さまの赤い糸 22

駆け落ちの現実 32

給料は一つ壺に 41

役に立った前科、 50

たった一つのウソ 61

女優の仕事と献立日記 65

一九五五年……

『映画芸術』誕生 84

映画全盛時代 92

テレビと五社協定 101

一九六八年……

六十歳でほんとの夫婦 110

『映画芸術』顛末記 117

「貞女の涙」 124

『テレビ注文帖』より 133

《ふぞろいの林檎たち》の青春  
《男たちの旅路・車輪の一步》

一九九〇年……

葉山の暮らし

158

三十五歳の二等兵

165

「気力」

171

一九九五年……

「別れの言葉」

180

あとがき

189

（口絵写真＝篠山紀信撮影）

一九九四年……



## 逝ってしまったあなた

私の大切なひと——家人が、突然、亡くなった……ほんとに突然、私ひとり残して……。

「なんとなく、おなかが痛い」「どうも身体がだるい」「胸が、へんにドキドキするなあ」

そんなことを言い出してから、かれこれ半月。おなかの痛みがだんだんはげしくなつて、寝ついて半月。とうとう入院して、胃潰瘍いかいようと診断されて一週間。夜昼よるひるなしの点滴のおかげか……重湯おもゆがのめるようになり、ホッとして三日目——死亡。

心不全、心筋梗塞。名残りの一言もなく……ベッドの傍に坐りつづけていた私は——ただ、呆然。

せめてもの慰めは、まったく、苦しまなかったことだった。

「眠くなったから、先へ寝るよ。あんたも早くおやすみ——台所の片づけものは明日にしない」

そう言っているみたい……いつものように、おだやかな顔で——。

でも……もう、二度と起きてはくれない。

病院から、やっと、わが家の居間に帰ってきた主の、冷たい頬をさすり、動かない指を握って——はじめて、泣いた……声をあげて——泣いても泣いても泣ききれなかった。私の半身、私の大切な人は、ひとりで遠くへ行ってしまった……もう、二度と私を見てはくれない。

毎朝、

逝ってしまったあなた

「あれ……もう、こんな時間か、また寝坊しちゃった、起こしてくれればいいのに……」

などと、照れくさそうに笑いながら——台所に立って炊事をしている私の顔を、そっとのぞきこんだのに……。

享年八十四歳——私より一歳二カ月若かった。

「どっちが先へ逝っても、葬式一切、しないことにしようね」

それが、私たち夫婦の約束——言い出したのは、あの人だった……十年ほど前、東京の家で……。

「おたがいに齢だから、何時、どうなるかわからない。そのときは、ごく身近な人にだけ話せばいい。知らされれば、顔を出さないわけにもゆかない、という人も多い。みんな忙しいのに気の毒だよ、この辺は駐車場もないしね」

私は大賛成——二人で、指切りげんまんした。

湘南へ引越してからはおさらのこと——こんな遠くまで来てもらっては申し訳ない、げんにわれわれだって、冠婚葬祭のつきあい一切、みごとにご免こうむっているのだから……というわけだった。

「お墓もいらなと思うんだけど……」

海を眺めながら、そう言ったのは私だった。

「もしかして、あなたが先へ逝ったたら、お骨をきれいな壺にいれて、居間へ飾って、私が死ぬまでいっしょに暮らすわ——私も骨になったら、あなたの骨といっしょにして、海へ投げこんでもらいましょうよ。ホラ、いつもきれいな夕陽が見える、あの海の向うへ……粉にした骨だけなら、お魚の邪魔にもならないでしょう——ねえ、そうしちゃいけないかしら……」

昔から、世間体も親類たちの思惑もいっこうに気にしない妻の顔を、しばらく、黙って眺めたあと、

「うん……そうだなあ、誰も彼も墓、墓って騒いだら、いまに日本中、墓だら

逝ってしまったあなた

けになっちゃうよね……うん、海に投げるか——そうだ、そうしよう、それがいい……決めた」

大きくうなずいたのは、家人——殿だった。

私は、自分たち二人の間では、いつも「殿」と呼んでいた。神経質で潔癖で、自分にも他人にもきびしい半面——甘く、やさしく、何かにつけて、おっとり構えるところは、まさに「殿さま風」だった。本人も、その呼びかたを面白がっていたし……そとの人に対して「うちの旦那」「旦那さま」と言うのも、機嫌よく聞いていた。

ただ——私が、エッセーのなかで「夫」と書いたときは、

「夫と書くのはやめなさい、家人としなさい」

と言われた。聞き慣れない言葉だったし、あとで、そっと辞書をひいたら、

「家の内のもの」のほかに「妻、あるいは召使い」の意味もあるというのが気に

なったが、殿は、それでも、家人がいい——と、いうことだった。

私が、なにやかや——雑文を書くようになったのは、殿のすすめだった。

ちょっとしたことから、半生記『貝のうた』を出版したあと、暮しの手帖社の花森安治先生のおすすめで『私の浅草』を書くはめになったが——あのときも、そののちも、つづけて身のまわりのことを書くように、しきりにはげましてくれたのは、殿だった。

花森先生は、

「ものを書く男は、たいてい、女房が筆をもつのをいやがるものだが——おたくの旦那は、やさしいのかね」

そうおっしゃった。

たしかに、やさしかった。多分、六十歳になって、初めて筆をもった妻を、なんとか、応援してやりたい——そう思ったのだろう。

逝ってしまったあなた

ただし——書いたものについての批評はきびしかった。永い間、演劇、映画、テレビについて、辛口批評を書きつづけていた殿として、妻の下手な文章を見すごすわけにはゆかなかったのだと思う。私は、忙しい女優の仕事と家事の合間に、書斎で書いたものを、すぐ、居間へ持ってゆき、愛用の座椅子にゆったりかけている殿の前で、声をあげて読み——批評をしてもらった。

ときには、

「何が言いたいのか、わからないね」「もうすこし、いい言葉がないかなあ」と言われ……あるときは、

「せっかくだけど——没<sup>ボツ</sup>にしないで」

と、きびしかったけれど——いっしょうけんめい、書き直したものを、

「ああ、いいだろう」「うん、だいぶ、うまくなったな」

と、いうこともあって……嬉しかった。

それほど厳しいことを言いながら——殿自身は、一言一句、書き直してはくれ

なかった。

「文は人なり——つまり、文章は書き手の人柄を示しているのだから、ほかの人間が手をいれては駄目。どんな原稿でも、始めから終りまで、ちゃんと自分で書くことだ」

そう言えば、殿が原稿を書いているときの姿は、はたで見えても胸がいたくなるほど、真剣そのものだった。

何十年もの間、殿が、そうやって、新聞・雑誌に書いたものの控えは、行李にいっぱいあった。東京から湘南へ越すとき、始末するように言われたけれど——私は、そっと持ってきて、書斎の奥の棚に<sup>たな</sup>いれてある。夜、<sup>よる</sup>夜半<sup>よなか</sup>まで机の前で頭をかかえていた姿が眼にやきついていて——どうしても捨てきれなかった。

逝ってしまったあなた



## 寄り添って

殿が八十歳になって間もなく、筆を折った。

「……やめた。もう、やめたよ、思うように書けなくなったから——やっぱり、齢だね。情ないけれど、仕方がない。いい加減なものを、他人<sup>ひと</sup>さまに読んでもらうわけには、ゆかないからね」

他人<sup>ひと</sup>にきびしい殿は、自分にもきびしかった。新聞・雑誌の連載原稿はすべて断わり……つづいて、映画・テレビの審査、合評も辞退した。どんなに引きとめられても、首を横にふった。

しばらくして……私も女優をやめた。いい加減なものしか、他人に見せられな